

つながりの中で 生きている
支え合いながら 生きている
だからこそ
他人（ひと）のよろこび・悲しみを
分かち合える世界が 開かれる



専明寺寺報 第378号

発行日 令和5年(2023)6月1日
真宗興正派 専明寺住職 脇屋俊英
TEL・FAX 0745-52-7402

くらしの仏教語豆事典 149

しし ふんじん
獅子奮迅

仏は獅子にたとえられる

獅子奮迅とは、獅子が奮い立ったように、勢いの盛んなことをいい、大活躍をする状態を形容する日常語です。

能『熊坂』は、盗賊熊坂長範の霊が、生前、牛若丸の旅宿に大勢で攻め入ったが、逆に切り散らされ、自分も命を絶ったと語ります。その壮絶な闘いを「獅子奮迅虎乱入、飛鳥の翔り」とありますが、いずれも兵法の名称だと註釈されています。

仏教では、獅子は「師子」と書きます。仏典に「諸仏の師子奮迅の力」（『法華経』）「師子王自在奮迅のごとし」（『大般若経』）とあります。仏が大悲の身を奮い、衆生のために外道などの小獣を威伏させる、その様子が、獅子が奮迅するのに似ているので、これを「師子奮迅三昧」といいます。仏が入る三昧です。

獅子は百獣の王です。仏も人間の王であり、獅子にもたとえるべきお方という意味で、仏教では、仏を獅子にたとえています。仏の座を師子座、仏の歩みを師子歩、仏の説法を獅子吼という具合です。

文 辻本敬順 本願寺出版社

しょう。はやぶさの活躍と、そして科学者たちの広く深い見識に触れることに胸を打たれつつ、あらためて、み仏さまのお言葉をお聞かせいただくことの大切さを思うのです。

本願寺新報 第3480号
「みんなの法話」より

北海道三笠市・善行寺住職
布教使 名和 康成
なわ こうじょう

専明寺ホームページ
<http://www.5b.biglobe.ne.jp/~senmyou/index.html>



お寺の行事の様子や境内の四季折々の草花など写真を交えて紹介しています。

真宗興正派田崎山専明寺

検索

— 仏さまの言葉を通してのみ知らされること —

見る人が見ると

皆さんは、無人小惑星探査機「はやぶさ」をご存じでしょうか。月以外の天体から世界で初めてサンプル（砂や石など）を地球に持ち帰ってきたのが、はやぶさです。

はやぶさの大きさは軽自動車くらいで、重さは500キロほどしかありません。その探査機が地球から3億キロ離れている「イトカワ」という落花生のような形をした長さ500メートルほどの小惑星をめざしたのです。

もし新幹線で行けば120年かかるほど離れており、そこに行くということは、まるで日本から放った矢を、ブラジルにある5ミリほどの的にあてるほど難しいことなのだそうです。世界中の科学者から絶対に無理だといわれていたのに、あきらめたらそこに進歩はないと挑戦し続けたのが、日本の科学者たちだったのです。

技術の粋を集めた機体は、数々のトラブルに見舞われつつも、なんと7年間の宇宙の旅を終え、イトカワの砂を採取して帰ってきたことは、当時大きな話題となり、映画化までされました。最後まであきらめない科学者たちの奮闘の様子と、ポロポロになりながらも帰還したはやぶさの姿は、たくさんの方々の感動を呼んだのです。

さらに注目を浴びたのが、はやぶさが持ち帰った砂でした。カプセルには、髪の毛の太さにも満たない小さな砂の粒子が、1500粒だけ入っていました。私たちが見ても、そのあたりに落ちているものと見分けがつかない砂粒。しかし、科学者が調査すると、

なんと46億年前に太陽系ができた時の様子がわかるのだそうです。

さらにアミノ酸や水分など、生命が生まれるために必要な要素がいっぱいつまっている、生命の起源が地球ではなく、宇宙にあることが照明されたのです。このことは、世界が驚く大きな発見でした。

私たちのいのちの起源が、はるか昔の宇宙の彼方にあった…。そのことは、私のいのちが数十億年の宇宙の歴史の末にできあがったものであることを物語っているのです。一朝一夕ではできない私のいのち。

のち。「あなたのいのちは、そこにいるだけですごいことなのだよ。」と、はやぶさと科学者は教えてくれたのです。

見る人が見るとわかることがあるのです。そのことは、私たちが仏さまのお言葉を聞かせていただくことの意味と通じるところがあると感じました。

私の闇を破る光

この如来は光明なり光明は智慧なり。智慧はひかりのかたちなり

行事板



6月

3日（土）午後1時～
奈良県産業会館 1F 大ホール
大和教区聞法の集い
節談説教・音楽ライブ
法話など

※詳細は専明寺まで
是非 ご参加ください！

6月

25日（日）午後2時～
一心会・ともしび会例会



仏事手帳

冥福は祈らないで 279編

- お葬式の弔電は本来、式の中でわざわざ皆に聞かせる必要のないものです。そんなことはするべきではないものなのです。しかし、習慣というものは恐ろしいもので、いつの間にか弔電を読み上げることが、当然のようにお葬式のセレモニーとして定着してしまっています。
- だから、その現状を変えようとしても、一筋縄ではいきません。喪主の要望で弔電を読まずにおいたら、あとで苦情が殺到して困ったと、ある葬儀社の方が嘆いていました。
- 弔電で困るのは、「ご冥福をお祈り申し上げます」という電文が多いこともあるのです。これは無理からぬことで、「冥福を祈る」は、死を悼む言葉の代表格のように、世間に認知されてしまっているのです。しかし、「冥」というのは暗い世界ということですから。意地悪く言えば、「冥福を祈る」とは、「私は明るい生の世界にいるけれども、あ

なたは暗い死の世界に行ってしまった。お気の毒なことだが、せめてその世界でお幸せに。」と言っていることに他なりません。

- もちろん、弔電を発信する人に悪意があるわけではないのですが、どう考えても、良い言い方ではありません。特に私たち浄土真宗では、「死」は暗いものではなく、浄土という明るい光の世界に生まれ行くことだととらえますから、そのお葬式の場にこれ以上ふさわしくない言葉はないのです。
- 「浄土へ往生」とはいつても、遺族にとっては、悲しいものは悲しいのです。だから、「冥福を祈る」のではなく、「謹んでお悔やみ申し上げます。」と言いましょ。これは、「悲しいですね。」という単純な温かい言葉です。

「続仏事の小箱」菅純和
本願寺津村別院より

クイズ浄土真宗

Q 98 浄土真宗が成立したしるしとなる書物は？

- イ、親鸞聖人の『教行信証』
- ロ、親鸞聖人の言行録『歎異抄』
- ハ、蓮如上人の『御勸章』

- 『教行信証』は、詳しくは『顕浄土真実教行証文類』と言い、親鸞聖人が心血を注いで浄土真宗の教えを体系的に説かれた浄土真宗の根本聖典です。「ご本典」とも呼ばれ、この書をもって立教開宗すなわち浄土真宗という仏教が成立したとされます。
- 成立年は、元仁元年(1224)で、さらに帰洛後も推敲を重ねられ、完成したのは20年余りたった親鸞聖人75歳の頃だと言われています。
- 『教行信証』は6巻からなり、「教」「行」「信」「証」「真仏土」の5巻で浄土の真実を、最後の「化身土」巻で仮の教えと偽の教えを明かされ、真実である阿弥陀仏の本願を信じて、皆が浄土に救われることを願われた内容です。
- 『歎異抄』は、親鸞聖人の

弟子・唯円房が、日頃親鸞聖人が語られていた言葉などを書き記した書で、「善人なほもつて往生をとぐ、いはんや悪人をや…」などで有名でしょう。また、蓮如上人の『御勸章』は、親鸞聖人の教えを平易に、また多くの門徒に伝えるため、声に出して拝読されたお手紙です。

答えはイです。
末本弘然著 探求社刊
「クイズ浄土真宗」より



国宝 『教行信証』坂東本

ひらがな真宗



限りないとは？ * 阿弥陀仏(1)

- ★ 私は、子どもの頃、空を見るのが好きでした。最近では天気を確認するために見ることはあっても、ただ意味もなく空を見ることがあります。ぼんやりと空を見る。時を忘れて空を見る。あれはいったい何を見ていたのでしょうか？
- ★ 「今、雲の向こうに見える青空のずっと先に空がある。限りない宇宙というものがある。さらに宇宙の向こうにも、ずっと空があるそう。どれだけ先があるのだろうか？」
- ★ 何かしら不思議な思いで、憑かれたように空の一点を見続けていたことを思い出します。けれども、どれだけ青空の向こうを見通そうと見続けても、今、自分の見えている範囲の空しか見えません。宇宙を想像しようにも、私などには、せいぜい理科の教科書に出てくる太陽系ぐらいのもので、それを越えることなんてできません。ましてや「宇宙が今も膨張している」という話を聞いたときには、頭が

- 混乱してしまいました。
- ★ また、二枚の鏡を向かい合わせに立て、その間にボールを置いて、のぞき込んだこともあります。ボールとそれをのぞく自分の顔が限りなく見えています。しかし、鏡の奥の方になるとよくわかりません。
- ★ 限りないものや、はかり知れないものというのは、確かにあるのですが、私にはよく見えず、正しく理解できていません。
- ★ ただ、なんとなく「無限」とか「無量」だとイメージしているだけにすぎず、本当に理解できている訳ではないのです。
- ★ 阿弥陀さまの「阿弥陀」とは、「限りがない、はかることができない」という意味で、すなわち「無限」「無量」であります。



伝道揭示

つながりの中で 生かされている

- 人生には想定外のことが起きます。先日、ちょっとした段差につまずいて足の指を骨折し、生活が一変しました。
- ギブスを巻いた足では、歩行、階段の昇降、入浴など今まで当たり前できていたことができなくなりました。いつも渡る横断歩道も渡りきる前に信号が点滅し始め慌てます。普段と違った歩き方のせいか、体のあちこちが筋肉痛になり、体や生活の歯車が1つ狂うだけで、当たり前の日常はもろくも崩れ去ることを体感しました。
- しかし、骨折したことが、漠然と日々を過ごしていた私に大切なことを教えてくれました。家族や職場の同僚たちが、いろいろと助けてくれるのです。迷惑を掛けているのにそれぞれの立場で気遣いを

してくれ、その温もりに大きな安らぎをいただきました。不都合な現実こそ、自己を見つめ直す重要なヒントが隠されていると感じました。

■ 人は独りでは生きられません。計り知れないつながりの中でお互いに支えあって生きているのであり、生かされている。すべてのものは”もっちもたれつ”という、ご縁の中にあるのです。

本願寺インスタ倶楽部
香川真二

【仏教のことは】
縁起(えんぎ)
つながりの中で 生きている
支え合いながら 生きている
だからこそ
他人(ひと)のよろこび悲しみを分かち合える世界が開かれる

こぼれ話

◎永代経法要並びに納骨法要には多くの方に参詣いただき、特に1日目は満席となりました。ありがとうございました。ご講師の日高法輝師から、親鸞聖人がお得度される際「あすありと…」と詠まれた訳や常行三昧堂

のお話が心に残りました。
◎工事の順番が変わり、今月に土塀の取り壊しとブロック塀の修繕から始め、本堂縁の工事はその後になりました。
◎蓮のつぼみが伸びてきています。もうすぐ咲きそうです。楽しみです。